



2015年1月号
 新版 第71号
 編集
 駿台甲府高等学校
 駿台甲府中学校
 駿台甲府小学校

山県大武のこと

指導監 石川 博

保護者の皆様におかれましては平安に越年されたことと、お慶び申し上げます。本年も「強い網」を通して学校の考えや様子をお伝えしますので、ご高覧の程よろしくお願いいたします。

甲斐国出身の思想家

さて、山県大武やまがたいたいという竜王(甲斐市)出身の学者をご存じでしょうか。今から二百五十年ほど前、江戸時代の中期に、当時の社会のあり方に疑問を持ち、著作によって、その思想を世に問うたのです。

具体的には、幕藩体制を批判し、天皇が実権を持つべきである、という立場(尊王論)です。高校用の日本史教科書(山川出版)では、「山県大武は江戸で尊王論を説き、幕政の腐敗を攻撃したので死刑に処せられた(明和事件)。」とまとめられています。ちなみに、甲斐国出身者で日本史の教科書に記載されているのは、信玄と大武だけです。

大武の偉大なところは二点でしょう。一つは、当時の幕藩体制に疑問を持ったこと、もう一つは、それを表明したことです。体制の中に入ってしまおうと、それに疑問を持つことは容易ではありません。

ません。現在の世界で、民主制を批判することや、資本主義のもたらす豊かさを否定することは困難です。そして、批判的な目を持って、それを表明したら自らの地位が危ない、という状況で、積極的に発言できるでしょうか。

疑問を持つ 表明する

この二点は、今の生徒にも求められます。様々なことを当たり前と思わず、疑問を持つこと。学力の向上には、覚えることだけでなく、考えることが必要であり、その第一歩は疑問を持つことです。世に言うブレイクスルーが突如起こるわけではありません。日々の小さな改良の経験が、時に大きな変革を産むのです。

もう一つの表明することも、欠かせません。いくら素晴らしい発想でも、それを生かすためには多くの人々の協力が必要であり、そのためには自らが率先して実践するとともに、他人を説得しなければなりません。大武は、酒折宮に日本武尊(やまとたけるのみこと)を称える碑を建て、江戸の吾嬬あづま神社には日本武尊の妃である弟橘媛(おとちばなひめ)の碑を建てるといった実践を行い、「柳子新論」などの著作を通じて人々に自分の考えを訴えました。

「柳子新論」は、漢文なので現代人には難解ですが、大義名分論から始まり、

最後は、支配者が暴君なら討伐してもよい、と持って行きます。この考えは徳川幕府を倒し、新政府を作る際に都合の良い思想です。禁書の扱いながら写本がいくつかわられ、幕末の志士、たとえば吉田松陰も読んで影響を受けました。もし、大武が文章を残さなければ、百年近い後の幕末まで影響を与えることはできなかったでしょう。

センター試験廃止後の入試

従来の学力観によれば、高校生までは知識を集積し、大学生になってからオリジナルな研究を行います。小・中・高校生の解く問題には一つの模範解答があり、それに合っている答案がマルを得る、ということでした。その極致がセンター試験でしょう。しかし、その学力観では世界から取り残されます。

これからは模範解答のない問題にどう向き合うかが問われます。センター試験廃止後の大学入試は、まだ不透明ですが、たとえば、英語では、読解することと同時に、書くこと、話すことが重視されることは間違いありません。国語でも古典の比重が減るでしょう。さらに、従来の教科の枠にとらわれない入試も、今以上に増える方向です。これは予想であると同時に、高校や教育関係者が、脱「単一正解問題」という機運に、大学入試を誘導していくべきだと考えます。

もちろん、九九を覚える、漢字の読み書きができるといった基礎的な記憶は欠かせません。大武も、数学、天文学、音楽、医学にまで通じていました(膨大な著作が残されています)。でも、大武の偉さはそういった博学さにあるのではなく、誰もが疑わなかった幕藩

体制という「枠組み」を壊そうと考え、それを本に著したことです。

大武はなぜ、このような思想を持つようになったのでしょうか。代官として大岡家に仕えていた時、地方の人々の窮乏と、武士の傲慢さを目にしたことが背景にあったと言われています。「柳子新論」でも、支配者の腐敗を攻撃している箇所に入っています。そして、儒教を学ぶ中で、抽象的な「仁」などの概念がこの日本で実現されているのかを問い、どのようにすれば具体化するのか、多くの可能性を探った結果、得た思想だと思えます。

このような思考方法——現実の中に問題点を見つけていくこと——は今の人々にも求められます。生徒諸君にも身につけてほしい思考方法です。

しかし大武にも限界があります。一つは幕藩体制に変わる新たなシステムを提示できず、中国古代を範とした天皇制を提唱したこと。もう一つは、思ったほど彼の考えが広まらず、結局、死罪になってしまったことです(表面的には、主宰する塾での発言の言葉尻をとがめられて処刑されますが、実際の理由は彼の思想が「危ない」と判断されたことでしょう)。

江戸時代には、罪人の扱いだった大武は、明治維新を迎えると一挙に偉人として称揚されます。多くの研究書が出版され、地元では山県神社が創建されます。しかし、戦後には、天皇制を推奨した思想家という位置づけで、あまり評価されていません。これほど毀誉褒貶の激しい人物もめつたにいないでしょう。世評に惑わされず、虚心地懐に大武を見て、その、疑問を持つ姿勢と表明する力に学びたいものです。

高校より

未年に想う

高校校長 酒井 徹哉

今年の干支は未羊です。羊に近い動物に山羊があります。羊はモコモコとした毛に覆われていますが、山羊はアングラ種やカシミヤ種等を除き短毛で、外見上の違いはありますが、顔つきや鳴き方は似ていません。学問上の分類は、羊も山羊も、鯨偶蹄目ウシ科ヤギ亜科ヤギ亜属に属していることから、非常に近縁の動物といえます。

ところが羊と山羊、性格や行動は似て異なるものなのです。羊は大人しく臆病、群居性で、平坦な場所を好みます。山羊は活発で独立心が高く、高い場所に登る傾向があります。

羊は群れをつくりませんが、前の仲間のお尻を追いかけているだけで、群れ全体で行動しているわけではありません。したがって時々群れがバラバラになると、迷子になり、まさに「迷える羊」になります。そこで、遊牧民たちは、羊の群れに山羊を何頭か入れています。山羊は餌を求めて積極的に行動をします。羊はそれについてくるというわけです。人間にとっても、山羊をコントロールすれば羊もついてくるので、都合が良いようです。

似て非なるものと同じと考えると、大きな間違いをします。「無党派層」と「政治的無関心」、「主張を訴えるデモ」と「ヘイトスピーチ」、「厳しくしつける」と「虐待」。これらの違いをしつかりと認識してほしいと思います。

二〇一五年は、戦後七〇年でもあります。日本は、この七〇年間、直接的な戦争に加わることなく、平和を維持してきました。今年の十一月、長崎でバグウォッシュ会

議世界大会が開催されます。この会議は、全ての核兵器と戦争を無くすために、一九五七年にカナダ・ノバスコシア州バグウォッシュに科学者が集まり始まった会議です。一九九五年にはノーベル平和賞も受賞しています。あまりニュースで取り上げていませんが、被爆地長崎で行われることも意義は大きいと思います。

平和な国を維持していくために、若い世代はしっかりと意思を持って行動をしろと、何を考えずに周囲の人々についていくのは、極めて危険な行動であるということを今年の今年、改めて感じました。

大学と高校

副校長 上原 雅志

今は昔、産業界と大学が提携する「産学協同」が学生から問題視されていた時代がありました。古典的な「学問の自由」「大学の自治」の考え方や、大学教育を職業教育と峻別すべしと説いたJ・S・ミルの思想なども一役買ったかもしれません。いかにして産学連携を推進するかが熱く問われる現代では想像もつかないことですが、私も基本的にはミルの考えに与っています。学問が実利の具となってはならない、漠然とそう考えていたのです。しかしそこ

にも捨て置けない疑問はありました。それは学問の独立性の根本にあるアカデミズムの価値です。拝金主義に侵されない生真面目な研究や、功利主義を排した基礎研究がいつか人類に貢献する可能性を、目先の成果主義によってつぶしてはならない、とは言っても、未来永劫、重箱の隅をつつき続ける研究も現実にはあろうし、あらゆる研究の存在理由をアカデミズムに据えて安閑としていて良いものかと。加えて、学問

の中身は日夜変化するのだから、要するにアカデミズムは、何でもありの合理化の方便になつてはいないのかと。

お金をたくさん使って遊びを尽くした近江商人達が、本居宣長の講じた学問を聴いて、世の中にこんな面白いものがあつたのかと驚嘆した、そんな話をどこかで読んだ覚えがありますが、「学問」の価値を「面白さ」と読み替えると、私の疑問が解決しそうな気がします。

「面白いもの」が「学問」であり、それを尊重するのがアカデミズムであると……人類への貢献でもパラダイムの転換でもよい、新しいとか稀少という価値もあります。古くても人間的で人の心を動かせば大きな価値です。「面白いもの」は、厳密に定義はできなくてもすべての良きものを包み込んだ概念で、そう言つて通じるような何かがある。高校の教育課程に複素平面が復活しましたが、「だって行列より面白いんだよ」という数学者の本音があるとしたら、私は仕方が無い、仕方が無いどころか、そうあるべきだと思います。高校生が、文科省検定の教科書で昔から相も変わらず「史記」や「源氏物語」を読むのは、やはりそうあるべきことだと思います。「面白いもの」は、公序良俗も何のその、しやちほこばつた人の懸念をよそに、千年、二千年後も学問の威光を放ち続けているのです。

数年後、大学入試センター試験が廃止されます。共通一次試験から始まり、現在の形に至る一斉型・マーク式の大学入試によつて、高校教育も随分と影響を受けました。面白くなくなつたというのが正直なところです。学校というのは教える側も学ぶ側も、面白さの威光に浴する場です。大学が学問の自立を取り戻し、それが高校の教育現場にも届くよう、そして、学問の真価を生徒に伝えるべく、教師の本当の仕事の可能性が花開くよう、期待してやみません。

小中高サッカー交流

長谷川 亮太

新年あけましておめでとうございます。昨年末12月6日(土)に第3回駿台小中高サッカー交流を行いました。例年は今井校舎で行っていましたが、今回は塩部校舎の人工芝グラウンドに拠点を移して総勢80名で実施しました。高校生が小学生にボールの蹴り方を教えたり、一緒にボールを追いかける姿はとても微笑ましかったです。兄弟の繋がりや、小学生・中学生・高校生間のコミュニケーションも様々なシーンでうかがえました。なにより子供たちの楽しそうな表情が一番の収穫でした。今回の試みで「チーム駿台サッカー」の強い網を張れた実感を持ってました。その網をもっと大きくしていくことで生徒・保護者・学園の発展につながっていくと思います。先生方、保護者の皆様のご協力のおかげでうまく運営することができました。ありがとうございます。次回からは保護者の皆様にもっと参加していただければと思います。これからも「チーム駿台サッカー」のますますの発展にお力添えをどうぞよろしくお願致します。



中学より

あたりまえの大切さ

―赤崎氏の言葉から―

中学校校長 河崎 哲郎

二〇一四年のニューズランキングの上位に入ったものに日本人3氏のノーベル物理学賞受賞のニュースがありました。3氏の最年長である赤崎勇氏も高齢にもかかわらずスウェーデンの授賞式に出席されました。赤崎氏がノーベル賞を受賞する前に出された本があります。非常に難しいと言われている青色LEDの開発に成功されて、その開発までの道のりを口述されたことをまとめた本です。「青い光に魅せられて」という本です。まさに赤崎氏の生涯はここまで、そして現在も青い光のために費やされているのでしよう。その本の中で名古屋大学での講演で若い人へのメッセージを乞われて次のように言っています。

- 一、夢(やりたいこと、目標)をもとう。
- 二、失敗を恐れない。
- 三、決めたことは最後まであきらめない。
- 四、疑問(好奇心)を大切にす。
- 五、輪(仲間、友達)を広げる。

この5つのことはとても当たり前のことのように思われるかもしれませんが、実際私自身もそう思いました。しかしこの当たり前のように思われることを実行することがどんなに難しいか、それもまた真実であると思います。多くの情報があふれているハウツー本も次々出る中、何が自分にとって必要なことであるのかを見失いがちです。少しでも楽にうまくできる方法があるのなら、その方法で楽にやりたい、と思う

のが人の常かもしれません。しかし、夢のような方法などやはりないと思うのです。当たり前のことを大切にすること、人としての原点に戻ることをこの年頭に自分自身にも言いかけさせているところです。

年末には中教審の答申があり大学入試の改革案が示されました。平成32年度から段階的に実施されることになっています。センター試験を廃止し新たな2つのテストを導入することと、試験内容を「思考力、判断力、表現力」を中心に評価する新テストにすること等が提言されています。知識偏重となつている現在の大学入試制度の反省からこのような改革案が実施されることになったわけです。今の中学生の受験期にはその試験制度自体に変化はないと思いますが、問われる内容は徐々に変化してくる可能性があります。これからの教育は思考力、判断力、表現力を身につけるべきものへと少しずつ変わっていくことになりそうです。勉強はただ覚えればよい、という姿勢ではないけないということなのです。でもこのことも考えてみればごく当たり前のことでもあります。自ら考える力、判断する力、伝える力、これらは人の能力としての基本でもあります。試験内容で言えば英語についても「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能を総合的に評価すること、と提言されています。考えてみればこれも当たり前のことです。言語なのですから。

本校の建学の精神はチャレンジングスピリットです。まさに自ら挑戦するこの力は赤崎氏が若い人に贈る5つのメッセージを素直に実行に移そうと努力することで獲得できるものだと思います。「学問に王道なし。」と言いますがまさにそれは真理であり、「人生にも王道なし。」だと強く思います。

第一回全国私立中学校

テニス選手権大会に出場して

テニス部顧問 永山 一宏

12月26日(金)から三日間、兵庫県の神戸総合運動公園で開かれた第一回全国私立中学校テニス選手権大会に男子・女子2チームで出場しました。

今年度から始まったこの大会は、北は北海道から南は九州までの全10ブロックから選出された、男女それぞれ16校の団体・個人で競うもので、本校は北関東ブロックの代表として男女ともに出場することができました。

集まった学校の顔ぶれを見ると、私立中学校の大会ということもあり、その多くが有名大学の付属や係属校、または著名な進学校でした。

一部の名前を挙げると、大学の附属や系列校では明治大学付属明治中学校や中央大学附属中学校(いずれも東京)や同志社中学校(京都)、立教新座中学校(埼玉)や立命館慶翔中学校(北海道)、上智福岡中学校(福岡)などが顔を揃え、また、関東大会でよく顔を合わせる桐蔭学園、桐光学園やサレジオ学院(いずれも神奈川県)などの進学校



や、地元の清教学園や大阪女学院(いずれも大阪)といった錚々たる学校が名を連ねていました。また、今回は女子チームでの出場でしたが、あの錦織圭選手の母校である開星中学校(島根)の名も見え、全国大会ならではの雰囲気本校の生徒達も感じ

たようでした。ちなみに、男女アベック出場となったのは本校Ⅱ駿台甲府中学校だけで、記念すべき第一回大会に男女とも名を連ねることができたのは、非常に名譽なことでした。

試合はダブルス2ペアとシングルス1名の3ポイントを競い合う団体戦と、各チームの上位2選手によるトーナメントで競う個人戦で行われました。

男子の団体戦は初戦・二戦目とも惜敗を喫し、敗者同士によるコンソレーションマッチに回ることになり、結局一勝しただけの悔しい結果となりました。女子の団体戦も振るわず、こちらも一勝を記録しただけでしたが、二日間でそれぞれ五試合を戦うことが出来、よい経験を積むと同時に、それなりの充実感を味わった大会となりました。また、二日後半から三日目にかけて行われた個人戦でも、男女各二人が二戦ずつを戦い、うち男女一人ずつが一勝をあげることができました。

実を言えば、男女とも今年の新チームの戦力はさほど高いものではありませんでした。これは、県新人戦で男女ともに三位に甘んじて関東大会進出を果たせなかったことでも明らかです。しかしながら、今回幸運にも全国私立学校に出場することができ、曲がりなりにも勝利の喜びを味わうとともに、多くの負け試合からもたくさんの課題を学び取ることができました。このことは、これからの生徒のメンタルや技術の向上そしてチームの成長に、少なからず寄与するものと確信しています。

今後この経験を生かして精進するとともに、応援していただいた保護者の方々や学校に感謝したいと思います。ありがとうございました。

小学校より

小中一貫教育

校長 坂本 宏行

あけましておめでとうございます。新年を迎え、希望に満ちた子どもたちの三学期がスタートしました。各学年のまとめの時期となります。一日一日の取り組みを大切に過ごして欲しいです。

さて、昨年十月、中央教育審議会の小中一貫教育特別部会で「小中一貫教育」を制度化するよう求める審議が行われました。具体的には、一つの教職員集団が一貫した教育課程を編成・実施する単一の学校である「小中一貫教育学校(仮称)」と、組織上独立した小学校と中学校が一貫した教育を行う「小中一貫型小学校・中学校(仮称)」を制度化します。どちらも市町村教育委員会の判断で設置できるようになります。

子どもの発達の早期化などに対応して九年間の教育課程を「四・三・二」や「五・四」にするなど、学年の区切りを柔軟に設定できるようにします。ただし、学習指導要領は現行のままを基本とし、「小中一貫教科」などの独自教科の設定が検討されています。

この背景には、小学校から中学校に進学するとき、環境面の変化、人間関係の変化などにより、不適応が起こりやすい「中一ギャップ」があると推測されます。二〇一一年文科省の調査によれば、小六の不登校七、五二二人に対し、中一の不登校は二一、八九五人、約三倍となっています。同時に「いじめ」の件数も二・五倍となっており、早急な対応が求められています。

駿台甲府では、既に小中高十二年間一貫

教育が完成しており、文科省が打ち出している「小中一貫教育学校」などには当てはまりません。同じ今井キャンパス内に校舎があり、「算数・数学」と「英語」の教科の乗り入れ、教員の交流・異動、クラブの交流、カリキュラム・教科指導の小中合同での検討・統一を行っております。

また、駿小では六年間を二つのステップでとらえ、発達段階に応じた指導を行っています。学童前期では、人格や性格の基礎が形成されます。基本的な生活習慣や読み・書き・計算を中心とした基礎基本を大切に、反復学習をします。学童後期は、意欲を自分の力で実現し、自主的に考え行動できるよう、経験を深めていく時期です。集団での役割や責任も意識できるようになり、学習面でも単に問題が「解ける」ではなく、物事の本質が「わかる・理解する」ことが重要になります。そして、周囲の対応も母性的なものから父性的なものへ変わり、子ども達は自立することを意識し、駿中へ進学します。

授業、休み時間や給食も常に担任の先生と一緒に過ごす小学校生活から、授業は教科ごとに専科の先生からの指導を受ける中学生活。思春期を迎え、外面的にも内面的にも変化していく中学校生活に対してなによりも自立が求められます。

教育界の変化も大きく、現在の小学校六年生が大学受験を迎える六年後には現行の大学入試センター試験が廃止され、「思考力・判断力・表現力」が評価の中心になるようです。

我々は常にアンテナを高くし、先取りしながら変化に対応していき、さらに小中連携を進めていきます。

音を感じる心を育てて

六年主任 奥村 貴子

十二月十八日に、毎年恒例の音楽発表会が行われました。各学年が一生懸命に練習してきた歌や演奏を披露してくれました。幼小連携の一環として、近くの保育園の園児たちにも参加をしてもらい、今年も全校が音を存分に楽しむことができました。

さて、各学年の歌や演奏を聴きあう機会には意外と少ないもので、体の成長と共に歌声も年々成長していつている様子がこの発表の場でよく分かります。低学年から中学年、そして高学年と、徐々に学年が上がるにつれ歌声にも色や迫力がつき、子どもたちにはよい刺激になります。

発表の司会進行は児童会です。園児たちを案内し、トップバッターとして演奏をお願いしました。毎年恒例となっているディズニードレシーを小さな体で、リズムをしっかりととりながら体全体を使って演奏をしてくれました。衣装も一つ一つ手作りで、まるでディズニートに行ったかのような楽しい気分になってくれました。

一年生は登場から元気がいっぱい大きな画用紙や段ボールで作ったカブを運んできて、全校を驚かせてくれました。国語の教科書でもおなじみの『おおきなカブ』を歌劇風にした合唱を披露してくれました。どの学年も、かつては学習した懐かしい物語に、思わず前のめりで聞いていました。「なかなかカブはくぬけませんよ」の歌声に、これからたくさん登場してくる動物に「ここからが長いんだよ。」とコメントを言いながら聞いていた子どもたちは笑顔。カブがぬけた時は、会場全体から思わず拍手がわきあがりました。

続いた二年生も負けじと大きな口をあけてディズニートソングを歌いました。ピアノ伴奏を聴きながら歌っている姿が印象的でした。三年生から六年生まではそれぞれの学年進行に応じた歌声で、さすがに歌詞の意味や強弱、聞いている人を感動させたいという気持ちが歌に込められていました。

各学年の発表後には今年度より発足した合唱クラブによる発表がありました。人数は少ないものの、日頃練習している成果がよく分かる綺麗なハーモニーに、思わず全校中が聞き入ってしまいました。全国小学生NHK合唱コンクールの課題曲でもあった『ふるさと』をとっても丁寧に仕上げている姿はみごとでした。吹奏楽クラブの発表は『風になりたい』と「アナと雪の女王」で、今回の音楽発表会はとても楽しく終わることができました。発表中は全校が曲の雰囲気にあわせて手拍子を入れたり、体をゆらして音を感じる姿もあり、大変良い時間を過ごすことができました。

二月八日には、桃源文化会館にて吹奏楽クラブと合唱クラブによる第一回駿小音楽祭が開かれます。多くの皆様に観覧していただき、駿小の音楽活動を今後ますます盛り上げていってほしいと思います。



本を読みましよう

副校長 内藤 真一

あけましておめでとうございます。年末・年始は家族でいろいろな話をする機会が増えます。我が家もその例外ではなく、東京で働いている子供達が帰省し、家族団らんを楽しみました。我が家では家族が集まると、面白かった本・映画・コンサートなどの話になります。子供達の話に東京の文化・若者の潮流を感じ、鈍った感性を若返らせる時もあります。このうち、映画やコンサートは山梨では見られないものが多いので、(これが山梨の最大の弱点ですね)最終的には本の話が一番盛り上がります。

今回は、昨年国際アンデルセン賞を受賞した上橋菜穂子さんの「獣の奏者」が話題になりました。この本は司書の辻先生が図書だよりのなかで紹介してくれたので読んだ人も多いと思います。私も年末・年始と時間が空くと、この本を読んでいた。私にとっては「ハリポッター」以来のファンタジーで、久しぶりに夢の世界を旅することができました。

本を読む人が少なくなった、と報道されています。電車に乗ってもスマホをいじっている人ばかりで読書派は少数です。本は映像に比べ直接的な刺激は少ないかもしれませんが、想像力を育てます。ゆっくりと地面に浸み込む慈雨のように私達を豊かにしてくれるはずで、遠い昔には「書を捨てよ、街に出よう」と言われていましたが、今は「スマホを捨てて、書を読もう」と言いたいのです。その後に街に飛び出していくように。今年はどんな本に出会えるでしょうか。皆さん、面白い本に出会ったら、教えてください。

益々元気で楽しい年に

一学年 齋藤隆一 花輪悠貴

小西静穂 中橋美紗

新年あけましておめでとうございます。子どもたちの笑顔と元気な姿が、今年も変わりなく見られる一年であることを願います。

十三期生七十二名は、四月に入学してから九か月が過ぎました。一年生にとっては多くのことが初めてですが、何事にも一生懸命取り組み友達と楽しく学校生活を送る姿から、心も身体も小学生として成長していることが感じられます。この成長には、一人一人のがんばりがありますが、ご家庭からの応援も子どもたちの大きな力になっていることは間違いありません。残りの三学期もたくさん愛情に支えられ、胸を張って二年生に進級できるよう、みんなですらにがんばります。

三学期は、一年間のまとめと進級への準備の日々です。学習にも意欲をもって取り組みますが、楽しい思い出もたくさんつくりたいと思います。スキー場での雪遊びや甘草屋敷への校外学習も楽しみですし、たこあげや豆まきなど、季節の行事体験もあります。そして、入学からたくさんのお話を教えてくれて、一緒にジャガイモや大根の収穫した六年生とのお別れの季節もやってきます。いろいろな経験をやる中で、日々成長していく子どもたちです。うれしかったこと、楽しかったこと、驚いたこと、出来るようになったこと、新しく知ったこと、一年生のたくさんのお出来事が大きな宝物になるよう、一学年教師一同全力でサポートしてまいります。今年もどうぞよろしくお願いたします。

笑顔多き年に!

二学年 有野真紀子 依田秀樹

奥石純一 佐久間恭子

あけましておめでとうございます。今年も健康と安全を示し、また、そのイメージから穏やかで温かな年・とも言われます。世界中が平和な一年になるといいですね。

いつも素直でキラキラと輝いている二年生。今年も「学校楽しいね!」と笑顔いっぱい頑張ってほしいです。

二学年では、秋から冬にかけて、様々な体験の行事を通し、自然と触れ合うことができました。県森林総合研究所では、裏山に上り、落ち葉や枝で遊んだり、大木に掛けられた手作りのブランコを漕いだり、遊びの天才である子ども達は工夫しながら楽しく活動しました。後日、そこで集めてきた落ち葉で、「焼き芋パーティー」もしました。つくし村で作ったサツマイモを新聞紙で包み水に浸し、それからアルミホイルに包みました。「おいしく焼けてね!」と言いつつながら焚火の中へ投げ入れました。本格的な焼き芋です。出来栄は上々! あつあつトロトロの黄金色の焼き芋に、子ども達は満面の笑顔で「おいしい!」。自然に感謝し、自然から学び、子ども達は成長しています。

三学期の生活科では、ご家庭の協力をいただきながら、一人ずつが生まれてからこれまでの「成長アルバム」を作成します。

たくさんの方々の愛情を受けて育ったことを感じてくれると思います。未(ひつじ)には、これから伸びゆく枝という意味もあります。子ども達の一層の成長を共に見守っていきたく思います。本年もどうぞよろしくお願いたします。

新たなチャレンジを!

三学年 山岸なぎさ 長澤宏治

筒井雅美

『やる気・元気・本気』を合言葉にスタートした三年生も、いよいよまとめの学期を迎えました。中学年となった七十六名は毎日の生活や、学校行事を通して、仲間と力を合わせて、どんなことも元気いっぱい、一生懸命に取り組んできました。

特に最近、子どもたちが目を輝かせていることは、二学期から導入されたiPadを使ったタブレット学習です。一人に一台、自分専用のタブレットを持ち、朝チャレの時間に百マス計算・計算ドリル・漢字・日本地図の学習アプリを使い、勉強しています。また、校外学習での班行動の際、タブレットで見学場所の写真撮影もしました。「こんな写真を撮っておきたい。」「ここは動画の方がいいかな。」と、事後学習を視野に入れて、現場の様子をより分かりやすく伝えるためには、どのように記録しておけばいいのか、子どもたちなりに工夫して使うことができました。そして、事後学習では、撮影してきた写真や動画を取り入れた見学レポートの作成・発表にチャレンジしました。写真や動画を教室の電子黒板に映し出し、タブレット上で操作しながら、見学場所がわかったこと・気づいたことをいさいさと発表する姿から、子どもたち自身が、タブレットの特性を活かし、意欲的に学習の幅を広げられていると感じました。

学習を重ねるごとに培われる興味心やプレゼンテーション力をさらに伸ばしていくよう、タブレットの良さを取り入れた、学び合える授業づくりに引き続き挑戦したいと思えます。

仲間と学び合い力をつける

四学年 田中愛子 河西さち

望月一志 川崎江里子

新年明けましておめでとうございます。

十期生が四年生としてスタートしてから早九ヶ月、実に充実した活動と成長を感じています。他校の四年生と交流した『連合音楽会』、色別応援団に加わるなど駿小の中堅として力を発揮した『運動会』、八ヶ岳の麓で一泊二日、初めての『宿泊体験学習』、子どもたちが主体となって企画・準備ができるようになった『収穫祭』、全身でリズムを表現し楽しく歌えた『音楽発表会』など、主な行事を振り返るだけでも、仲間と共に困難を乗り越えながら、達成感という喜びを重ねてきた成長がうかがえます。また、テレビや新聞等の取材を受けるような特別授業も多種多様あり、学習の幅が広がりました。特にプロ棋士による将棋授業や、山日新聞社と共同で本格的な新聞を作成した授業は、とても貴重な体験となりました。

このように、昨年は、学年全体が『みんな』の精神のもと、目標に向かい仲間とともに創り上げる生活や活動を工夫してきました。日々の学習も『漢字相撲』や『計算力コンテスト』などを励みに、みんなで盛り上げ、子どもたちが主体的に学ぼうとする力を獲得することができました。

いよいよ三学期です。二分の一人形式も成功させなくてはなりません。これまでの活動を振り返り、自己や仲間のよさや頑張りを認め合い、今何に向かって努力する時なのか、課題を明確にしながら高学年へと繋げていきたいと思います。保護者の皆様、本年もよろしく願います。

飛躍の一年へ

五学年 山下 潤 中沢恭子

小澤那月

新年を迎え、次なるステージに向けた準備の時期になりました。五年生はいよいよ最高学年への移行期間に入り、小学校の中心を担う立場になります。クラスや学年の事だけでなく、学校全体の為に何ができるかを考えて行動する力が必要とされます。

今まで築き上げてきた活動に囚われず、新しい活動をどんどん取り入れ、個性溢れる駿小を作って欲しいと願っています。四月から準備するのではなく、今から少しずつ動き出して行きたいと思っています。

学習面においても、課題確認テストに加え、中学進学を見据えた駿中入学準備テストも始まります。五年生になり、ノートへの意識に変化が見られ、ノート作りが上手になりました。これはとても素晴らしい成長です。この取り組みを継続しつつ、毎日の学習を計画的に取り組みむようにしていきたいと思っています。また、高学年で習う内容は、中学の基礎となる部分が多いのが特徴です。復習をしっかり行い、基礎をしっかりと固めて、次学年を迎えたいと思います。

三学期のテーマは「自分に厳しく 仲間を優しく」です。まわりの雰囲気にならざる、場面を意識して自ら行動に移せるような強い心を持つこと、そして切磋琢磨し合える仲間の大切さに改めて気づき、仲間と共に高まり合っていける集団作りをしていきたいと思っています。

昨年は保護者の皆様に温かいご支援とご協力を賜り、ありがとうございました。本年も引き続き宜しくお願い申し上げます。

締めの新春

六学年 奥村貴子 花輪美樹

嶋田 颯

卒業までの日数を数える事が、六年生の学年を持つと恒例となります。年明けと共に、カウントダウンが始まる学年もそう多くはないでしょう。四十七日。これが六年生にとって残された登校日数。そしてこれが最高のもめになる日であり、中学生になる準備をするための力を蓄える日数でもあります。一日一日が無駄にはできない、大切な日々がここから始まります。

始業式に、子どもたちには、「節目」の話がありました。人生には何度か節目の間があるということ。それは目に見える形で迎える式典の催しではなく、自分自身の心の中にしっかりと区切りやけじめをつける締めめの気持ちであるという話です。多少難しい内容ではあるものの、しっかりと耳を傾ける六年生の目を見てみると、心に届いたかなと少し安心したところです。

しかし、肝心なのはここからです。小学校生活を振り返りながらも、学習も最終まじめに入っていかなければなりません。一人ひとりにあったアドバイスをしながら、全体の気持ちを締めたいけるよう、教員団しっかりと二〇一五年も力を合わせ努めていきます。何よりも必要不可欠なことは、学年全体、子ども、保護者、教員の意識が一つになることです。誰一人として欠けることなく、確実に日々を刻んで学校生活を終わらせていく思いが大切です。卒業が近づいてくるのではなく、自ら卒業に向かっているのだという意識を持って四十七日を充実させていくことが六学年の願いです。

保健室・図書室より

養護教諭 松田 智策

新年、あけましておめでとうございます。

一年間はあつという間ですが、子ども達の姿を振り返ってみると、身長が伸びたり、体つきがしっかりしてきたりと、子どもの成長を通し、一年間が過ぎたことを改めて実感させられます。

旧年中は、デング熱やエボラ出血熱などの聞きなれない感染症がニュースや新聞で沢山取り上げられました。一見、小学生には難しそうな内容でしたが、子ども達からは「どうやって感染するの?」「感染した人はどうなっちゃうの?」などと、数多くの疑問の声が保健室に届きました。他国の状況や他者を心配する心、そこから自己の健康を見直そうとする意思に、とても感心させられました。今後その意思を持ち続け、自己の健康を大切にしてほしいと思います。

今年度一杯という限られた時間ではありますが、最後の最後まで子ども達の健康の保持増進に精一杯努めていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

司書 辻 直子

新年あけましておめでとうございます。

本年も、子ども達の好奇心を刺激するような新しい取り組みを考えていきたいと思います。お待ちしておりますので、宜しく願います。

さて、子ども達には、冬休みに自分の読書生活を振り返る「読書生活アンケート」に取り組んでもらい、自分の読書傾向や図書室について改めて考えるきっかけをつくりました。このアンケートを参考にし、子ども達もつと借りに来なくなる図書室を目指して大きく前進する一年にしたいです。